

観光の語りを虚構として分析する方法に関する考察#1

Perspectives for an Analysis of Travel Narratives #1

村上 和夫*

Kazuo MURAKAMI

Summary : Travelogues take many styles and may be called documentaries, novels, diaries, poems, speeches, talks, and so on. A reason for this diversity is that they are created not only for establishing records of a writer's travel but also as an expression of his or her personal pleasure from the travel experience. Therefore, their rhetoric may be attractive to the reader or audience. However, many tourism researchers tend to use some parts of these travelogues for their research as records of a state of travel taken in some specific period of history. This behavior of tourism scholars suggests that they misunderstand writers or narrators of travelogue as recording secretaries of travels, though their main roll is to create a story of their own experience of travel. Accordingly, they do not analyze rhetoric, eloquence, or themes in travelogues as discourses, fictions, or travel writings. This paper presents a research problem for discourse analysis of travelogues written as narrative by former tourists.

Keywords : 旅行譚 (travelogues)、元観光者 (former tourist)、語り手 (narrator, writer)、虚構性 (fictional, factious)、ディスコース分析あるいは談話分析 (discourse analysis)

1. 観光経験が語られる諸相

1-1 アントニオ・タブッキの記述

アントニオ・タブッキ (Antonio Tabucchi) は、イタリアの現在を代表する作家の一人である。彼の作品 "Donna di Porto Pim e alter storie" (1983)¹⁾ [邦訳『島とクジラと女をめぐる断片』] の「まえがき (Prologo)」に興味深い一節がある。

旅行記と言うジャンルに属する本は、時代に合った文章でなければならぬと同時に、ともすると記憶がひとりでにつむぎだしてしまう空想には侵食されない種類の記憶を必要

とする。逆説的なりアリズム感覚のおかげで、僕は、そうした本は書くまいと思った。いまや途方も無い野心をつちかうよりは、幻想をはぐくむほうが品格からしてもふさわしい年齢に達したと確信をもって言えるから、このあたりで運命とあきらめて、自分の生来の傾向にあったものを書く事に決めたのである。(Tabucchi (1983) p.9)

ここで、タブッキは、この作品を彼の旅行経験の後にはぐくまれた幻想からつくり出されたものだという。タブッキ自身の手法にそくして言えば、彼が描いた幻想の中にリアリティ (逆説的なりア

* 立教大学観光学部教授

リズム感覚 [un paradossale senso di realismo]²⁾ が彼に感じさせ伝えたい感情)があると言うことになる。また、旅行記 (un diario di viaggio) を「時代に即した記録 (tempestività di scrittura)」、あるいは「空想に侵食されない記憶 (una memoria inattaccabile dall'immaginazione che la memoria produce)」を前提に書かれたものとして彼は自分の作品の対極におく。この “Donna di Porto Pime alter storie” を構成する小品の主人公は第1人称で表されているのだが、それは幻想の中のタブッキであり、あるいは、幻想の中のタブッキと言う人物像である。

読者は、一般にタブッキを作家だと思い作品を小説 (fiction) として読むが、このように彼に「まえがき」に書かれると、改めて主人公が実際に旅行者であった事を意識せざるを得なくなる。旅行記をタブッキの述べる事実を記録した文章だとすれば、実際にわれわれの日常では、観光旅行から帰った人 (帰ったからと自ら述べて) が友人や家族に旅行の思い出を語るという行為が、このタブッキの作品のフレームと良く似ている事に気付かされる。旅行経験から得られた情緒、例えば農村風景がもつ望郷感を満たす情景や、下町の情緒纏綿たる風情、あるいは外国でのホームステイでその家の女性が麗しかったと感じる情況、そしていかがわしい風体の案内人に騙されたのでないかと自分を情けなく思う自己嫌悪など、旅行中の折にふれて起こるさまざまな感情、情思、また、そのような感情を誘い起す気分や雰囲気は、虚構を用いフィクションとして語るにふさわしいものである。一般に旅行の思い出を語るという行為は、旅行中に撮影された写真 (構図の確定がフィクション) や、旅程を示しながら聴き手 (あるいは読み手) に旅行の事実性を類推させ、実は話の核心がこの情緒を伝える事である事が多いと言える。それによりこれら情緒が伝わると言う事が旅行の楽しさを伝えるために重要であるならば、実は事実性の類推は厳密に事実を伝える必要は無く、旅行経験に基づいたフィクション的な語り、旅行記とは別のある審級にある独特の存在である事は明らかな事と考えても良い。

1-2 問題の所在

タブッキが言う旅行記の条件は、もちろん書く側の条件であるが、それが有効性を持つのは、読む時に読者側においてである。旅行記の概念をタブッキのように限定してしまうと、旅行経験を基に虚構的に旅行の物語を構成する広がり、事実から創造的に膨らんだ虚構として語られる旅行の情緒的世界 (タブッキは幻想 (immaginazione che la memoria produce) と呼ぶ) に続いて行く事になる。そして、この虚構として語られる旅行が、事実性を問題としない全てが、虚構である話の上まで拡大し、創造される時にこの世界は事実の対極に到着し、小説やアニメーションとなるのである。

旅行の楽しさは、旅行中に期待通り物事が展開する旅行に対する満足と、旅行経験を語る時にその語りを持つレトリックが生み出す楽しさとに分ける事ができると考えられる。もちろん、このレトリックが生み出す楽しさは、語られるまでは語り手が想う文脈 (物語内容) として存在している。この語りは、ただし未完の楽しさであって、聴き手あるいは読み手があって、完結される性格のものと考えられる。

近代観光の定義があまねく述べるように、観光旅行が旅行者にとって楽しい経験であるとする場合、それはその楽しみが個人の文脈で楽しさとして語られた時に、社会を構成する一般的な単位としての一人間の満足ではなく、旅行の主体たる一人の個人の楽しさに帰することになる。

秋の紅葉風景は、旅行者に「歓楽極兮哀情多」(秋風辞)³⁾ と言う気持ちをもたらすと言われる事がある。これは一般的な人の問題ではなく、個人の文脈の愉しみであると考えられる。そのような想いにひたる個人の回想を読み、あるいは聞く時に、周囲の人はその人の過去を想うことであろう。それが読み手あるいは聴き手の役割であり、観光旅行の楽しみ (あるいは愉しみ) が個人の意志と関係を持つ理由となる。観光が個人の自由な時間と自由な意志によって生み出される、楽しみのための旅行行為であるならば、楽しみはその行為の中心を占めるものであって、一方で一般的な近代人の満足の問題であり、同時にそれは個人が

その人の旅行の思い出を語る時に愉しさとして表出する個人のものである。本稿は、この後者の個人の旅行経験の思い出に関する語り・記述（以下旅行経験の語り）の分析を観光研究の一部に組み入れることについて試論の前編である。

1-3 旅行者の語り空間

旅行経験の語りを展開される空間に関わる主体は、三者ある。すなわち、①旅行者であった語り手（書き手・話し手の双方を含む。以下、特に区別する必要が無い場合は語り手を用いる）と、②語りの聴き手・読み手ならびに、③物語の主人公などの登場人物である。

また、この空間の地平は旅行から帰還後から始まる語り手・書き手が有する時間の流れである。その上で、旅行経験に端を発する物語（旅行譚あるいは、もし許されるなら観光譚）の物語が語り手により創られ、発話もしくはテキストなどとして、読み手・聴き手の相互作用の間におかれる。その語りは、とりわけ美を求めて行われる時に、作品とも呼ばれる。上記のタブッキの“Donna di Porto Pim e alter storie”はそれである。また、作家でなくとも、個人の人生観の表象などが色濃く見られる場合、それは作品の性格を有すると言える。しかし、ここで作品と言う審級を明らかにする事は、旅行経験の語りについて検討を始めていない現段階では時期尚早と言えるので、稿を改めて論ずるとにする。

この空間で交換されるものは、話し言葉や文章とそれらにより伝達される文脈である。また、この空間は、不可視な存在であり、主に虚構を論理的に分析して来た諸手法を導入する事によりその特性が明らかとなると言える。記述分析を例にして分析手法を列挙すれば、その広がりが見えてくるはずである。まず、言葉と文脈の分析にはミモロジック（言語的模倣論あるいは模倣的言語論：mimologique）やディスクール分析（修辞法の分析）とナラトロジー（物語論：narratology）などの手法がある。文脈は内容を表現する手段であるが、作品の内容はそのテーマの下に展開する。したがって、作品のテーマはリアルな経験として

語り手と聴き手・読み手の相互作用の中に置かれる。多くの場合テーマ自体がこの空間で消費される対象⁴⁾となる。テーマ分析（thematic criticism）がこれに対応する。テーマ分析の近傍に、さらにテーマと文脈の修辞的關係をテキストの相互作用として扱った分析手法であるパランプセスト（palimpsestes）の研究⁵⁾がある。つぎに、作品に読み手がある事で、読み手の作品の理解と作家への相互作用的還元と言う分析が成立する。それが読者受容論（reception theory）である。最後に、テーマやそれを内容に結ぶモチーフは社会との關係を持つとして、テキストや発話を社会科学の視点から分析する手法がある。ことに植民地—脱植民地からの視点やイデオロギーや政治体制との關係で旅行に関する記述が分析される。テーマ分析は、近年文化人類学の影響を受けて、この分野での拡張が顕著でもある。カルチュラルスタディーズと称される分野の一部はこの分野である。また、語りが話し手により行われたのであれば、談話分析やエスノメソドロロジーの分析手法が適用されることにより、その語りの空間を知ることができるようになる。

さて、この旅行経験の語りの空間を知ろうとすれば上記の分析手法に頼らねばならないが、一方でその実際の広がりには日常語の範囲において成立している。そのために、旅行者は自分の旅行経験を友人などに積極的に話そうとし、webサイトや雑誌にも旅行経験の話は数多く登場する事となる。さらに、出版産業にとって、この空間の作品ジャンルである旅行エッセイは重要な市場となり、そこでは旅行経験をもとに書かれたテーマが「場所」の消費と言う文脈で消費されていく。テーマの消費は、旅行をめぐるトポスとの關係でうまれる。市場があればディレッタンティズムを志向する嗜好評論の領域も成長することになり、それが上記の分析成果をトポスとの關係で引用し、空間と個人とを結びつける絆として成長する事になる。

文化人類学の影響を受けた一部の研究がテーマ分析の手法を導入している以外に、以上の分析手法を用いた一般的な人々の旅行経験の語りの分析は観光研究においてその経験は少ない。わずかに、

専門の作家の作品が対象となる事はあるとしても、それもディレッタンティズム風を模した研究であり、旅行者だった一般人の作品の分析には関心さえもたれていない。したがって、これらの手法を適用して一般の人々が編んでいる旅行経験の語りを収集整理することで、旅行経験の語りの空間はその地平を現すとともに、そこで人々が旅行譚を表すための楽しみ方の全体像を解明するすることができるはずである。

1-4 旅行記の手法の採用と意味のゆらぎ

さて、タブッキが言う旅行記は、文学の通俗的な分類によれば日記文学と言うジャンルに属する作品を指している。ごく普通の旅行者が、日記として旅行記を書く場合、それはタブッキが言う条件を満たす事ができるであろうか。空想に侵食されない記憶に従って記述すると言う事が可能であろうか。旅程あるいは小遣い帖を記録として採用し、文脈を構成すればそれも可能だろう。しかし、それではテーマは単なる記録であって、文学的経験をもとにしたテーマが無くなってしまふ。それは、思い出の記述とはならない。さらに、空想を許さないとすれば、ここで主人公の人物像は筆者と同一視できなければならない事になる。仮に、アーリ (J.Urry(1990)) が指摘するように、観光への視線は旅行者の生活の側から発せられているものとしよう。そうだとすれば、それはマッカネル (D.MacCannell) が言うように、筆者と主人公を一般的近代人 (modern-man-in-general) として同一視できることになり問題は解決する。しかし、一般的近代人は抽象化された人物概念であり、社会科学の論文では研究対象を構成できても、旅行経験の語りの登場人物たる主人公の属性を特定に語ることはできないと言ってよい。逆説的であるが、旅行経験の語りにおいて語り手により語られる主人公 (往々にして自分) は、必然的に主人公を一般的近代人からずれた人物像として語り、しかしそれに近づけて創り出さなければならなくなるのである。

しかし、だからこそ旅行記を書く事は難しいが、文学経験をもとにした旅行記の表現、つまり旅程に沿って事実を並べるように旅行経験を語る事

が、思い出を語る上で意義を持ってくるのである。主人公をわざと滑稽な一般的近代人として描く事は、旅行経験の語りで良く行われる表現方法である。これは、一般的近代人の規範からずれない範囲で旅行記をパロディにすると言う事である。そこにある、面白さを伝える仕組みには、パランプセストが働き、さらにそれがアイロニー (irony) を含む事を知る事によって、旅行経験を語る意味のゆらぎが語りの面白さを起しているのである。

2. 旅行経験の語りの空間への観光研究の接近

2-1 経験の消費との関係

近代の観光を「楽しみのための旅行～」と定義する場合、楽しみはアーリ (J.Urry(1990)) が指摘する視点を我々は消費のフレームの中で満たす事ができるであろう。この説明は旅行者の一般的近代人の特性が持つ楽しみと言える。この事に同意しても残る疑問は、「楽しみのための旅行～」は「楽しむために行く旅行」なのであるから、その「楽しさ」が何であるのかが依然として不明のままにされていると言う不可解さである。それは、具体的に獲得した「楽しみ」が旅行経験者によって他者に表現されなければ、「楽しかった」のかどうかは他者にとって不明なままで、楽しさを伴うかどうか不明なのだから、その旅行は、観光であったのかも不明となったままであると言う疑問にとらわれるからである。しかし、近代社会における観光とは、そもそもそう言う概念なのである。大衆個人の活動ではあるが、それは集合的に説明され、確率論的に個人が持つ自由が保障されている事が重視されてきた社会現象なのである。それは歴史的に見ても、極論すれば経済的なそして時間的な自由の階級的偏りを訂正しようとしたブルジョア思想の影響を強く受けた社会現象の一つであり、個人に帰属しない事がすなわち匿名性を保障するものであった。そして、その認識過程も同時に集合論的概念によってなされて来たと考えられるのである。

したがって、ある「楽しみ」が特定の個人に帰

属する事は敬遠され、非排他性が確保されていると理解されることが好ましい事となった。ここに「楽しみ」が匿名な主語に対する目的語⁶⁾となる事を可能として商品化を促す社会の文脈があり、他の名詞と結びつく事で「楽しみ」の市場の形成を許す事になる。これにより「楽しみ」は消費できる事柄となり、それが都市からのまなごしを集合的に伴うと言う説明は、集団の消費の方向が問題を持つとしても、集団としてその問題に向かっていると言う説明なのであるから、理念的な地平には抵触しない安心な説明として受け入れられる事になるのである。

同時にこの傾向は、非排他性において隠される自由の個人所有があり、それに人々が無関心になる時に、ハビトウスによる文化資本の階層的な偏りが生じるとして警告を受ける可能性をもたらしている。

観光研究における旅行経験の消費に関する研究も、旅行経験の語りに対する批判的研究も、社会的な視点から一般的近代人旅行者の概念を得て、それが持つイデオロギー的特性を分析するに至った。それは「楽しみ」をどのような社会の構造が、あるいは規範が導いているかと言う点に焦点をあてたものとして価値がある。旅行経験とは一定の行動の開始、連続そして終了でしかなく、それは欲望が行動にあるいは消費に還元される過程としてしか理解することは、行動に焦点を定める限り有効なことであった。しかし、そのことで旅行者であった人の「楽しさ」(あるいは個人の意志と結びつくような愉しさ)が帰還後に培われていく(あるいは「悲しい気持ち」にかわる)と言う問題は看過されていったのであろう。

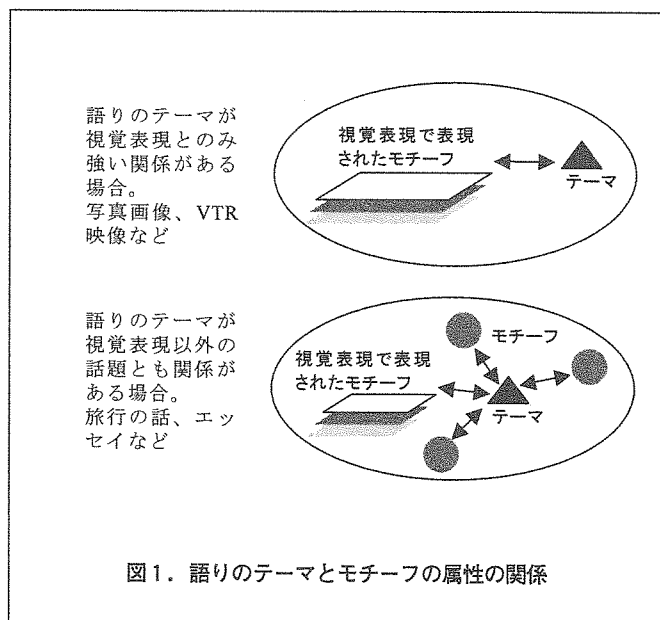
近代における旅行経験の消費は、「楽しい」の形態の消費であると同時に旅行経験を軸に、観光行動が生起している期間中に限定されない人々の日常にある「楽しい」のテーマの創造と消費でもあ

る。旅行経験を友人との会話の話題とし、エッセイをwebサイトで発表し、それがまた新しい旅行の「楽しみ」を形態としてあるいはテーマとして消費させて行く。そこには文学の専門職である作家や詩人たちも自らの旅行経験を語り加わって、テーマを提供している。この非観光空間における語りの研究が、観光研究では未開拓の領域として残されているのである。

2-2 作品へのかかわり

旅行経験を語る作品の分析に近い分析は文化人類学以外にも、視覚表現を通じた表象に記号論的視点からも試みられている。写真やビデオテープへの記録の方法や絵葉書の購入と郵送などが研究の対象となってきた。研究方法も視覚表現に関する記号論的な分析が行われている。これらの成果は、旅行者(あるいは旅行者で在った者)の行為を分析する事を目的としたものであり、一般的近代人旅行者の性格を記述することが目的であった(図1参照)。

これに、作品に表現されているテーマや文脈あるいは、読者受容論の分析を加える事で、研究を社会現象の研究から旅行者個人の表現方法の研究



へと視点を拡大することができる。ただ、そもそもテーマ意識の希薄なのが一般的近代人旅行者の特性だ、と言うものがアーリなどの指摘であるだから、マッカネル以来のパラダイムに従うとすれば、このような研究自体無意味なものとなる。しかし、他方で、観光行動自体の観察から指摘できる事はそれとしても、旅行後に展開される語り行動と内容がまったくテーマを欠くとは言えないであろうし、その分析が無意味だと言う例証にもならない。また、仮に語りがテーマを欠くのだとしても、それは語りられる物語を聴き手あるいは読み手が受容する事が退屈となると言う事であり、それは問題となる。だからこそ、タブッキの作品のような作家の寄与を人々は喜ぶのである。

ここで、研究対象となるものは、一般的近代人旅行者の行動ではなく、彼らを含めて人々が旅行後に旅行経験を語った作品それ自体と言う事になる。そして、一般近代的な旅行者は、その登場人物（例えば主人公）のモチーフとして引用され描かれる事になる。例えば主人公とパロディの展開において主人公の属性やパロディの文脈（例えばオチ）が利用されることになる。

作品を作者である個人を通じて社会の文脈へ関係付けすぎると、語りの視覚表象の研究や批判的研究のように社会的な構造矛盾にばかり関心が囚われて、「楽しみ」の研究からずれていく事になる。したがって文学で言う作家論的研究、観光研究流に換言すれば、旅行者個人論的研究への深い関わりは、無効とは言わないまでもそれに終始する展開は避けねばならない。特に、研究しようとする空間には、登場人物と言う人物像や聴き手・読み手と言う主体が存在する事を考慮する必要がある。例えば、例えば、登場人物のアポステリオリ (aposteriori) な決定を、旅行者個人論的に展開する事は、虚構の構成を分析することを看過する事になり、語り分析の議論を中途半端に終わらせ、人々の眼を社会構造的関心にばかり向けてしまうことになってしまう事に注意しなければならない。

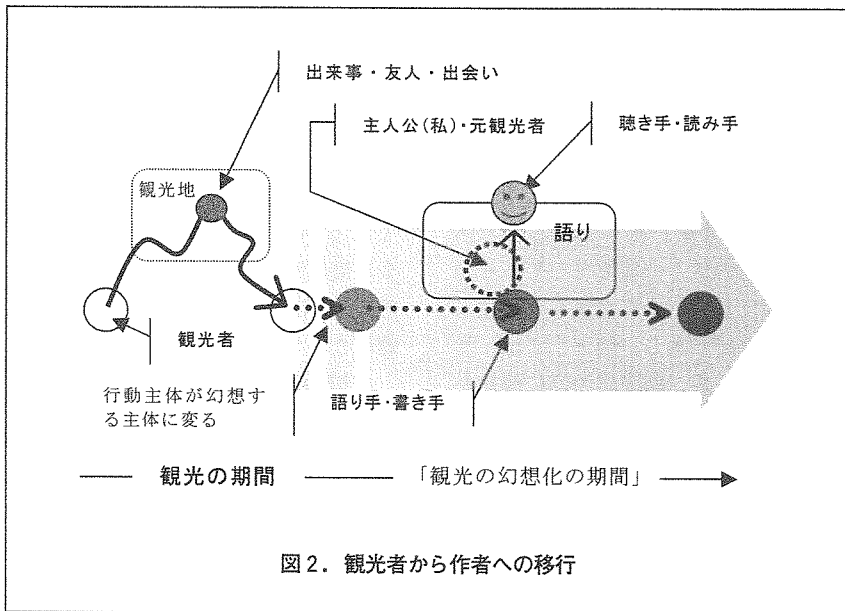
2-3 新しい旅行者の概念

さて、多くの旅行経験の語りは第1人称で書か

れており、その主人公は筆者の分身と言う事ができる。しかし、筆者が自分を主人公として執筆したと主張しても、すぐに主人公を筆者自身と判断することは軽率な事である。それは、一部虚構が混在する語りにおいて、主人公がテーマとの関係においてアポステオリに記述される事は当然の事だからである。「翻弄される私」「滑稽な私」と言う主人公の人物像は、筆者の日常生活でアポステリオリな1面かも知れないが、同時に文脈を面白くするためにもテーマを軸に考えてアポステリオリな人物像である事になる。聴き手・読み手側の視点が、作者と人間的に関係を持ち主人公に作者を重ね合わせて見る事が出来るのは、それは聴き手・読み手側に作者がアポステリオリなのである。研究分析において、あくまでも書かれた、あるいは発話された物語を軸に物事を考えてゆく事が大切で、登場人物の人物像をアポステリオリな実在の人物と混同してはならないのである。

ここに人物像としてアポステオリに決定される「旅行者」と言う状況が生まれる。一般的近代人として観光者を考えてきた観光研究において、この「旅行者」を観光者として位置付ける事は初めての経験となる。作品の登場人物が観光者と言う属性を持つからには、観光研究上のこれまでの概念をあてはめて、登場人物の行動を分析しても良い事になる。しかし、「旅行者」として仮定される動機が、作品のテーマから生まれると言う事になり、観光行動論的にみても観光消費論的にみても分析の対象とは成らなくなってしまう。仮に、登場人物の行動を観光者と仮定して分析した場合、登場人物の行動と一般的近代人として観光者の行動特性の乖離度が分析結果として説明される事になるだけであり、それは登場人物の人物像を修正する意味すら持たない事となる。

さらに、それすらも成立しないかも知れないのである。なぜならば、物語展開の錯時法の処理により、文脈の最初の段階で登場人物が目的地に着いて居ると言う事が起こら無いとは言えないからである。そして、後に往きの電車に乗っている状況や旅行動機の説明が行われると言う事があろうからである。旅行動機が無い上に行きの交通手段も明示されずにいきなり目的地に居る、と言う



状況は現在の観光研究としては考えられない時間の処理である。この文脈を無理やり旅程順序にもどせば、研究が恣意となり合理性が損なわれる事に成るのである。

このようにミモロジズムや錯時法が語りの文脈を特徴付けている時に、その分析では、テーマあるいは文脈にそって主人公が決定され、それが必要ならば旅行者となるという事を承認しなければならない。それを可能とするためには、観光者が主人公に移行するので無く、語り手（作者）へと転換する事を承認する必要がある。観光を行う期間は観光者であった者が、旅行期間を終了して幻想の期間へ入り、旅行経験（＝観光経験）を語る作者へと転換して語り（作品）を創り、聞き手・読み手と相互作用する事を承認する必要がある。その上で次に、語り手は語りのテーマとの関係において（必要ならば文脈との関係も含めて）登場人物として旅行者（＝観光者）を描く事を承認する必要がある（図2参照）。もはや、登場人物としての旅行者（＝観光者）は、これまでの観光研究にとってのアプリオリな存在であった観光者では無くなるのである。

2-4 虚構性の承認

登場人物と旅行者や観光者との概念調整の次に重要な事は、語られる旅行経験の内容が事実かどうかと言う虚構性（factious）の問題である。すでに、タブッキの記述のところでみたが、タブッキは自身の旅行先での出来事を元にした幻想から作品を創り上げている。そのように彼が書いているので、彼の作品は虚構を含んでいると、まずは、読者は理解して読むことになる。ここで問題になっている事は、タブッキによって語られる内容は事実か事実でないか言う事である。タブッキは、自分の語りには事実からの創造が含まれていると言うが、彼の期待はそう書く事で、読者がタブッキを信じて良いかどうか不安になる仕掛けを作り上げる事にも見える。“Donna di Porto Pim e alter storie” (1983)では、彼によってこの仕掛けが表面に出ている。彼の作品はポストモダンだとされる点か、いつもは隠されているこの仕掛けにある。

この語られている内容の事実性の問題は、物語に必要な虚構性の問題と深い関りがある。語り手と聞き手・読み手が内容の事実認識をどのように持つかと言う問題と関係を持つからである。事実と語りの間の事実認識については、語り手と聞き

手・読み手双方が話の内容を事実と認識し、また内容が事実であると言う関係を基本として問題が展開する。

例えば、語り手が旅行中に自分で撮影した写真を用意して、旅行中の経験を事実として友人に語っているつもりの時、友人も同様に事実としてその話を聴いていると言う関係を基本とするのである。次に、この基本形の第1の展開として、その語りの内容が事実と反している事を語り手が知らないまま語ると言う展開がある。例としては、文化人類学研究で用いられる、観光客の為に偶然を装う観光地の人々の話を用いると分かり易い。客であった語り手が自分の経験を偶然の事実として話題にし聴き手もそう理解すると言う場合である、また、恋人を装ってAがBを旅行に誘い、BはAがBを愛していると思込でしまいそれを友人Cに語った場合もその例となる。いずれも事実は嘘であるが、旅行経験は嘘を暴けないままの騙された状態が語られる場合である。このような場合、分析では、語られた内容は事実として扱うことになる。

次に第2の展開としては、語り自体が事実を誇張して語るという展開がある。語り手が旅行経験を大げさな作り話にして、聴き手を喜ばせようと努力するような場合である。上記と同じ観光客の為に偶然を装う観光地の人々の行為を、客であった語り手が偶然の事実と認識したままで今度は、その人の格好や仕草を大げさに話題にして、聴き手を楽しませようとしたような場合である。この場合が虚構に該当する。最後に第3の展開として、語り手が事実の真相を知ったにも関わらず、知らない素振りをして経験を語るという場合が考えられる。この第3の場合は、事実を事実として語るという基本形に該当する。なぜならば、語りの内容に虚構は無く、基本形と同じ話となるはずだからである。

虚構と内容の事実性の関係が問題なのは、第2の展開例の場合である。虚構とは、テーマと聴き手とに関連する約束事である。嘘を語ってはいけないと言う約束(暗黙の約束〔=期待〕も含む)のもとで事実と反した事を語ればそれは誠実さを汚す嘘⁷⁾である。しかしながら、事実と反する

事を語ったとしても、それがテーマとの関連で必然性を持つならば、それは虚構として承認される事となる。そこに、虚構を用いる意味が出て来る。嘘と分りながら聴き手は話を聞く事になる。話のテーマは、話の流れが事実認識の嘘を含んでいる事で侵されないからである⁸⁾。例えば、登場人物である同行者の滑稽な嘸や、「歡樂極兮哀情多少壯幾時兮奈老」と言った感情は、話のながれが例え嘘を含んでいても、それ自体は十分に伝わる感情なのである。

虚構は、作者が幻想の世界をへてテーマを得、語りを用意する事により必然的に介在し、聴き手・読み手もそれを期待する場合、旅行経験の語りの重要な要件となる。旅行経験を友人に話す場合、まず友人は「〇〇に行って、何が面白かったの」と聞くであろうし、語り手が期待ほどの経験を観光旅行でできなかったとすれば「それが、酷かったんだ」と答えるであろう。そもそも近代観光が、「楽しみのための旅行～」と言われる事にアーリらの指摘のように一定の視点からの期待が潜在するとすれば、観光の旅行経験は虚構が用意されても不思議でない状況が基礎的に存在していると言えるのである。

さて、ここでタブッキの「逆説的なりアリズム感覚」に話を戻そう。「逆説的」と彼が言うときに、それは対抗文化が持つ批判の視線を体制批判に向けるのではなく、作家が立っている所は同じとしても向きを人道主義へ変える事を言っているが、同時に「虚構の中において真実を語るつもりだ」と言う作者としての態度表明でもある。大浦はこの事を「虚構性の表明はそれらのもつ本来的機能のいわば一側面にすぎない。本来的機能とは言うまでもなく、ある現実をつくり上げること、しかもそれをリアルな現実そして観衆あるいは読者の前に提示することである」⁹⁾と説明している。これが虚構の役割でありそれを用いる目的となる。旅行経験を語る場合、期待されるのは、話の楽しさと面白さであり、時として馬鹿々々しさでもある。

ブーアスティン(D.J.Boorstin)は、近代人的な観光者が擬似的体験で満足していると批判し、アーリも彼らが自分のおかれていた産業社会的状

況からのまなざしでしか観光地を観る事はしないとマスツーリズムを批判した。社会からの視点においてその主張は了解できるが、観光旅行者たちが得た「楽しみ」のリアリティに彼らが言及する事は無かった。むしろ、それはリアルではないとすら思っていたのであろう。後の社会で、反社会的と嘲われる事であるとしても、観光旅行経験の「楽しみ」の表現において、虚構は不可欠な装置であり、語りを心から笑うためには、あるいは笑う事が話のメタ情況にある悲しみや喜びを聴き手・読み手に伝えるために、虚構は実際の観光行動には無いが、その経験を語るの場面において重要な役割をする。「楽しみ」のリアリティと迫真性を生み出す装置と言う事ができる。

3. 研究成立の意義

観光を主体客体論的に考えれば、観光者の観光が終了すれば、観光主体の存在意義が消滅するのであるから、このように人々が旅行経験を幻想に持ち込んで行く次元は、もはや観光研究の範疇から外れると考えるのが一般的な理解と言える。そして、旅行の思い出を語るという行為も観光行動に付随して生じる関連現象でしかないと考えるのが妥当な見解であろう。しかし、観光研究者がそう考えている間に、観光研究の領域は他の学問領域により拡張されて来た。たとえばカルチュラルスタディーズでは、作家達が書いた旅行関係の文章が持つテーマと近代の視線との関連性の分析を試みている。作家達の文章は、帰還後に書かれる事が多いわけで、彼らの研究では作家の観光者としての態度や旅行終了後の作家活動が作品から逆説的に問題視されている。彼らの研究の中心は、作品のテーマ設定が植民地主義的傾向を持つことや、それを描くための“観光行動をする観光者の人物像”の分析にある。このような研究領域の設定は、近代観光が成立していなければ存在し得ない領域であるにも関わらず、観光研究における観光主体の概念を越えたところに研究対象の焦点が結ばれている事になる。換言すれば、作家の文学的経験にまで近代観光は影響を持ったにも関わらず、それを観光研究は視野の外において来たこと

になるのである。

観光をする動機付けを説明変数にして観光者の行動を予測する研究や、同じく観光者の行動を説明変数にして観光の観光地社会への効果を研究するこれまでの観光研究の手法と並行して、近代観光の視点を説明変数として人々の世界観や文化の考え方が受けた影響を分析しようとする傾向がカルチュラルスタディーズの影響を受けた観光研究において一定の認識を得るようになってきた背景には、近代観光を取り巻く社会状況への研究者の認識変化が進んでいる事をあげることができる。もはや、かなり多くの研究者が対抗文化的志向から社会の多様性へと関心を移行して来ていることは確かな事である。

研究者集団の志向変化の原因は、大きく2つが考えられる。第一は、そのような志向を誘導する理論パラダイムが作用すると言う状況であり、第2には、彼らの研究対象である社会が実際に変動すると言う状況である。前者は、ポストモダン理論と呼ばれるリオタード (J.F. Lyotard) らによる思想的な動向¹⁰⁾であり、後者は消費社会の成熟化による社会の分節化である。前者に対しては学問文化の風潮と言う批判の議論¹¹⁾もあってパラダイムとしての優位を確保するに至っていないが、研究者たちに近代のパラダイムを意識させ、多様性への思考が無視できないものである事を認識させている¹²⁾。そして、そのような意識で社会状況をみると、しっかりとした説明は確立されないとしても、社会は分節化した状況に見える事になったと考える事ができる。

観光者が一般的近代人ととらえる時に、それをこれら2つの視点から再構成してみる事はできないものであろうか。一つは観光者に対してそれを冷静に見るもう一人の旅行者。もう一つは旅行者に好みの人物像を重ねて多様に弄びながら自分の「楽しみ」のリアリティを探すと言う実際の社会で起こっているであろう分節化状況を映し出す方法。これらの二者を可能とする手法である。それが、旅行経験の語りの分析である。

旅行者(=観光者)は観光が終わった時点で語り手に移行し、旅行者は人物像として語り手に描かれる。研究者は、旅行経験をリミックスする語

り手（元の旅行者＝観光者）の思考や方法を分析する事で近代観光研究に一定の距離をおく事ができる事になる。この点が、旅行経験の語り分析を観光研究の範疇に加える事を主張する意義である。

参考文献

- 1) Antonio Tabucchi (1983) "Donna Di Porto Pim e alter storie", Sellerio editore via Siracusa 50 Palermo. (本論文では2001 Sedicesima edizioneを使用)、須賀敦子訳 (1998)『鳥とクジラと女をめぐる断片』、青土社。
- 2) 彼の「逆説的なリアリズム感覚」とは、タブッキ自身が「自分の反対側ものをスパイのように見ようとする古くからの悪癖 ("un mio vecchio vizio di spiare le cose dall' altra parte" (Tabucchi (1983, p.11))」と呼ぶ対抗文化意識を反省する事により得る事してきたと考えている文学的視線。第二次世界大戦前のレジスタンスに始まり戦後のカトリック若手神父の運動を経て1960年代末まで続く動きを、後に弁証法的 (dialettico) に止揚したイタリアのインテリジェンスが持つ代表的な感性の一つ。タブッキの作品が“ポルトガル”を他者としてその感性の表現に成功し、多くの支持を集めた。視線が生まれる場所と投げかけられる情緒はいずれもポストモダン的な空間な入れ子構造を使った表現になっている。
- 3) 漢武帝の詩、秋風辞の「歓楽極兮哀情多 少壯幾時兮奈老何」（歓楽極まりて哀情多し、少壯幾時ぞ老を奈何（いかに）せん）より。
- 4) 「テーマがこの空間で消費される対象となる」とは、語りの主題自体が、主人公を通じた舞台としての目的地にまつわる言説の消費（場所の消費）と言える事が多いからである。このような語りでは、旅行経験は、一般に錯時的に旅程上の訪問先と強い関係を持ち、同時に聴き手・読み手にアプリアリな筆者らの属性を分りやすく一般性もたせた主人公（＝「キャラ化」、語り手に対しても客体化している事が多い）に演じさせ内容（言説）が進行する。その多くは、トボスとして噺であり「(笑)」や「(泣)」で終わる。それ故に、おどけや滑稽な主人公が登場するフィクションが小説家によって描かれたりする。
- 5) 例えば、Gérard Genette "Palimpsestes, La littérature au second degré" Seuil. 1982がある。
- 6) ここでは名詞の楽しみ（同様に名詞に楽しむがある）について言及している。が、日本語には、名詞の他に形容動詞としての楽しみがある。形容動詞は、形容詞の一部であるが、動詞のように活用し述部（レーマに準じる機能を持つとされる）を構成する。したがって、主語が個人である事を要請する可能性が高くなる（実際には主語が匿名化あるいは意図的に隠される事になる）。他方、英語やフロマン語などの形容詞は、be動詞を伴いあるいは名詞との性数一致を伴って変化するので、主語が一般性を持って匿名ならば、その目的語としての「楽しみ」が非排他的なものとしてとらえられる可能性は言語構造上高くなる可能性を持つ。都市からのまなざしの理解もこのような文脈を背後に読まれるべきではないだろうか。
- 7) John R. Searle (1979) "Expression and Meaning" Cambridge University Press.
- 8) 全てが虚構であり文学の中で高い価値の認められている小説やアニメーションなどは良い例である。
- 9) 大浦康介 (1996)「フィクション」、大浦康介編著『文学をいかに語るかー方法論とトボス』新曜社、pp.263-264。
- 10) リオタードはポストモダン思想の引き金となった思想家として知られているが、それは彼の著作 "La Condition postmoderne: rapport sur le savoir. Collection 'Critique.'" Paris: Minuit, 1979. が刊行されたためともされる。
- 11) Alan Sokal and Jean Bricmont (1998) "Fashionable Nonsense: Postmodern Intellectuals' Abuse of Science" 田崎晴明、大野克嗣、堀 茂樹訳 (2001)『「知」の欺瞞ーポストモダン思想における科学の濫用』、岩波書店
- 12) 例えば、自分の中の奇異性は他者の存在を認める事で成立し、「個人主義は自分の不安と自分の限界に対する自覚である」とするクリステイバ (J.Kristeva) は、記号論の研究者であるが、彼女の著作 J. Kristeva (1988) "Etrangers a nous-memes", Librairie Arthème Fayard, 池田和子訳 (1990)『外国人ー我らの内なるもの』法政大学出版局、はそのようなポストモダンの志向の認識を良く表している。